

Press Release



100年前に、
今を見つけた。

アール・デコ と モード

京都服飾文化研究財団
(KCI)
コレクションを中心に

Art Deco and Fashion:
Centering on
The Kyoto Costume
Institute Collection

2025 10/11 — 2026 1/25 三菱一号館美術館



1920年代を中心に世界を席卷した装飾様式「アール・デコ」。生活デザイン全般におよんだその様式は、「モード」すなわち流行の服飾にも現れました。ポワレやランバン、シャネルなどパリ屈指のメゾンが生み出すドレスには、アール・デコ特有の幾何学的で直線的なデザインや細やかな装飾が散りばめられています。また、服の形状はウエストを絞らない簡潔なシルエットになり、スカート丈はひざ下にまで上がりました。それらは古い慣習から解放され、活動的で自由な女性たちが好む新しく現代的なスタイルでした。

2025年は、パリで開催された装飾芸術の博覧会、通称アール・デコ博覧会*から100年目にあたります。この記念の年に、京都服飾文化研究財団(KCI)が誇る世界的な服飾コレクションから、この時代を表す選りすぐりのドレスや資料類約200点を紹介します。加えて国内外に所蔵される同時代の絵画、版画、工芸品などを展示し、合計約310点で、現代にも影響を与え続ける100年前の「モード」を紐解きます。

*現代産業装飾芸術国際博覧会(Exposition internationale des arts décoratifs et industriels modernes)

見どころ

- 1 ポワレ、ランバン、シャネル、パトゥなどパリ屈指のメゾンが生み出す1920年代のドレスを多数紹介
- 2 世界屈指のファッションアーカイブである京都服飾文化研究財団(KCI)コレクションから、アール・デコ期の選りすぐりのドレス約60点と服飾小物(帽子、バッグ、靴など)を一挙公開
- 3 アール・デコ博覧会から100年を記念し、当時の服飾の流行を、絵画、工芸、グラフィック作品などとともに総合的に検証
- 4 100年前の活動的な女性を彩った、腕時計を含むジュエリー類、化粧道具など、現代につながる様々なアイテムが集結



ドゥイエ イブニング・ドレス 1925年頃
京都服飾文化研究財団 撮影：畠山崇

展示 章構成

序章 アール・デコ
—— 現代モードの萌芽

第4章 異国趣味とその素材

第1章 モードの変化と新しい身体観

第5章 アクティブな女性たち

第2章 アール・デコ博覧会とモード、
芸術家との協働

第6章 新しい身体表現とスポーツ

第3章 オートクチュール全盛期の
女性クチュリエたち

終章 受け継がれる
アール・デコのモード

京都服飾文化研究財団(KCI)について

京都服飾文化研究財団(The Kyoto Costume Institute, 略称KCI)は、西洋の服飾やそれに関連する文献資料を収集・保存し、調査・研究する機関として、1978年に株式会社ワコールの出捐^{しよつせん}によって設立されました。現在、17世紀から現代までの服飾資料を約13,000点、文献資料を約20,000点所蔵。それらを多角的に調査・研究し、その成果を、国内外の展覧会「LOVEファッションー私を着がえるとき」展、「ドレス・コード?—着る人たちのゲーム」展(ドイツ含む4都市巡回)、「モードのジャポニスム」展(世界7都市巡回)などや、研究誌『Fashion Talks...』、広報誌『服をめぐる』の刊行を通じて公開しています。

ウェブサイト <https://www.kci.or.jp/>

アール・デコ と モード

京都服飾文化研究財団
(KCI)
コレクションを中心に

Art Deco and Fashion:
Centering on
The Kyoto Costume
Institute Collection

会期 | 2025年10月11日(土)~2026年1月25日(日)

開館時間 | 10:00~18:00 ※入館は閉館の30分前まで
(1/2を除く金曜日、会期最終週平日と第2水曜日は20:00まで)

休館日 | 祝日・振替休日を除く月曜日、および12/31と1/1
(トークフリーデーの10/27、11/24、12/29と会期最終週の1/19は開館)

観覧料 | 一般 2,300(2,100)円
大学生・専門学校生 1,300(1,000)円
高校生 1,000円
※()内は前売料金
※前売券はオンラインで10/10まで販売
※高校生は前売券設定なし
※障害者手帳をお持ちの方は当日一般料金の半額。付添の方1名まで無料。
他の割引との併用不可

主催 | 三菱一号館美術館、公益財団法人 京都服飾文化研究財団

特別協力 | 株式会社ワコール

後援 | 在日フランス大使館/アンスティチュ・フランス

協賛 | DNP大日本印刷

協力 | 日本航空、株式会社 七彩

お問い合わせ | 050-5541-8600(ハローダイヤル)

美術館サイト <https://mimt.jp/>

展覧会サイト <https://mimt.jp/ex/artdeco2025/>

プレスリリース トピックス

01 現代モードの萌芽

02 アール・デコ博覧会の役割と最新モード

03 身体観の変化

04 クチュリエと 芸術家のコラボレーション

05 オートクチュール全盛期の 女性クチュリエ

06 アクティブな女性たちと 服飾小物

07 スポーツとモード

08 今に受け継がれる アール・デコのモード



ラウル・デュフィ《ポワレの服を着たモデルたち、1923年の競馬場》1943年 石橋財団アーティゾン美術館

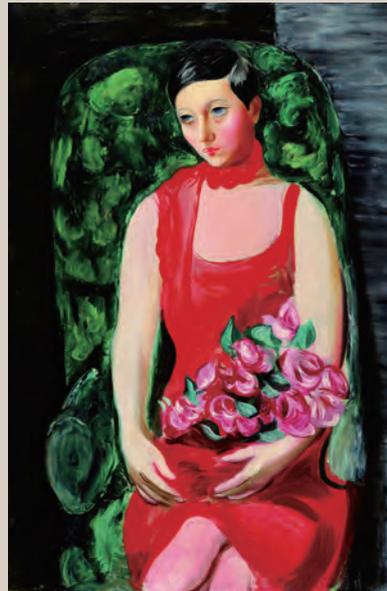


ヒール 1925年頃 京都服飾文化研究財団
撮影: 畠山崇

01 現代モードの萌芽



シャネル イブニング・ドレス 1928年
京都服飾文化研究財団 撮影: 畠山崇



モイーズ・キスリング《ファルコネッティ嬢》
1927年 ポーラ美術館

精緻に手刺繍された
ビーズやラインストーンの輝きは
夜の装いの真髄!



ジャン・パトゥ イブニング・ドレス(部分)
1927年 京都服飾文化研究財団 撮影: 来田猛

第一次世界大戦終結後、都市の消費文化が開花した1920年代のフランス。のちに「アール・デコ」と呼ばれることになるこの時代、新しいライフスタイルを楽しむようになった女性のモード(流行の服飾)は新たな局面を迎えます。それは、前世紀に比べると格段に活動的になった女性に適応した現代的な装いの誕生でした。服は簡潔なシルエットをみせるようになり、服飾小物や化粧道具は携帯性と小型化が進みました。さらに、時間や場所、目的によって細分化し、1日に数回にわたって着分けられてきた装いは、軽やかな昼用と煌びやかな夜用、そしてスポーツ服に集約していきました。こうした新しい装い方とそのスタイルは、当時新進のクチュリエ(服飾デザイナー)たちが模索した現代性の表象であり、今日にも受け継がれています。

後に「リトル・ブラック・ドレス」と呼ばれた

シャネルを代表するスタイル



シャネル デイ・ドレス 1927年頃
京都服飾文化研究財団 撮影: 来田猛



カルティエ製のフルーツサラダ・
リング 1930年
国立西洋美術館(橋本コレクション)
撮影: 上野則宏



指輪型時計 1920年代
ダズリング 撮影: 若林勇人



ルースパウダー入りコンパクト(二種)
1920年代初頭
カネボウ化粧品(アンティークコンパクトコレクション)
撮影: 若林勇人

02 アール・デコ博覧会の役割と最新モード



キャロ姉妹によるイグニング・ドレス『1925年パリ現代産業装飾芸術国際博覧会公式報告書』第9巻より
1927年 京都服飾文化研究財団



ポストカード「ポール・ボワレの川船」
1925年 京都服飾文化研究財団



ロベール・ボンフィス
ポスター「現代産業装飾芸術国際博覧会」
1925年
京都工芸繊維大学美術工芸資料館

当時のフランスでは高級産業品の輸出が拡大し、なかでも服飾品の輸出が急増していました。こうした社会状況を背景に、1925年にパリで開催された通称アール・デコ博覧会では、服飾が芸術性の高い産業のひとつに位置づけられ、全体で5つのグループに分けられた展示のうちの一つが「服飾」に充てられました。そこでは、衣服や宝飾品、香水、帽子や靴など、パリ屈指のクチュリエ、宝飾メーカー、香水メーカーらによる最新の品々が展示され、会場となったグラン・パレやエレガンス館、ブティック通り、そしてポール・ボワレ(1879-1944)の川船を使用した展示は、各国のメディアの耳目を集めることになりました。

03 身体観の変化



ドレス 1903年頃
京都服飾文化研究財団 撮影：畠山崇



シャネル ドレス 1926年頃
京都服飾文化研究財団
撮影：広川泰士



ジャクリーヌ・マルヴァル(ヴァーツラフ・ニジンスキーとタマラ・カルサヴィナ)
1910年頃 個人蔵/ジャクリーヌ・マルヴァル委員会(パリ)協力



ブラジャー 1920年代
京都服飾文化研究財団
撮影：畠山崇

コルセットでウエストを締めつけたアール・ヌーヴォー期の装いから一変。

簡潔なシルエットのドレスやランジェリーはアール・デコ期の特徴に

19世紀末から20世紀初頭、流麗で有機的な特徴をもつ芸術様式アール・ヌーヴォーが隆盛しますが、当時のモードではいまだ身体をコルセットで人工的に造形し、レースやフリルを多用した、ときに装飾過多にも思えるドレスが主流でした。しかし、アール・デコ期になるとその様相は一変し、服は身体の曲線を強調しない直線的な裁ち線で構成されるようになります。この方向性を明確に打ち出したのが、ポール・ボワレやガブリエル・シャネル(1883-1971)をはじめとするパリのクチュリエたちでした。彼らが提唱するモードに呼応し、下着のあり方も変わります。コルセットは取り払われ、現代にもつながるブラジャーが登場します。また、ひざ下まで裾丈が上がったスカートから見える脚には、薄い絹製のストッキングが合わされました。

こうした20世紀初め頃の身体観の変化を当時の画家は的確に捉えています。たとえば、近年再評価が進むジャクリーヌ・マルヴァル(1866-1932)は、実験的な身体表現を試みて当時フランスで話題をさらっていたバレエ・リュス(ロシア・バレエ団)のダンサーや舞台俳優たちの生き生きとした身体と装いを、爽やかな色彩で描き出しています。

04 クチュリエと芸術家のコラボレーション



ルネ・ラリック
アトマイザー「サン・アデュ（さよならは言わない）」
ウォルト社 1929年 箱根ラリック美術館



ツィママン デイ・ドレス(テキスタイルデザイン:ラウル・デュフィ) 1922年頃
京都服飾文化研究財団 撮影:畠山崇

多くのクチュリエに採用された
画家ラウル・デュフィのデザインによる
テキスタイル



ソニア・ドロローネー
《ソニア・ドロローネー：
絵画・オブジェ・同時的
生地・モード》
1925年
京都服飾文化研究財団

簡潔なかたちが主流になったモードにおいて、芸術家とのコラボレーションは新機軸を開拓する契機となりました。クチュリエたちは、新進気鋭の画家や工芸家たちが生み出すデザインを積極的に採用し、新たな芸術性と装飾性に富んだモードを創出しました。一方の画家や工芸家たちも、旧来の手法から脱却し新しい芸術表現を模索する過程で、服飾のクリエイションに参画していきます。ポール・ポワレらに斬新なテキスタイル・デザインを提供したラウル・デュフィ(1877-1953)や、新しい色彩概念を絵画だけでなく室内装飾や服飾に持ち込んだソニア・ドロローネー(1885-1979)、ウォルトをはじめとする、クチュリエがプロデュースする香水のために、多様な香水瓶のデザインを提供したルネ・ラリック(1860-1945)らがその代表です。

05 オートクチュール全盛期の女性クチュリエ

幅広い層から支持を得た

ランバンの優雅なドレス



ジャンヌ・ランバン イブニング・ドレス
1920年代前半 京都服飾文化研究財団 撮影:畠山崇

時代の変化に敏感だったシャネルの服は、

活動的な新しい女性のワードローブに



シャネル デイ・アンサンブル 1928年頃
京都服飾文化研究財団 撮影:畠山崇

服の新しい構成や作り方を

開拓したヴィオネ



マドレーヌ・ヴィオネ イブニング・ドレス
1929年 京都服飾文化研究財団 撮影:畠山崇

自らのメゾンを大きく成長させたクチュリエには、女性も含まれています。19世紀末に服飾の仕事をはじめたジャンヌ・ランバン(1867-1946)は、折々の流行を取り入れつつ、独創性のある作風で幅広い世代の女性から支持を得ました。先見性に秀でたガブリエル・シャネルは、男性服の要素を女性服に取り入れるなど、革新的なモードを次々と誕生させました。マドレーヌ・ヴィオネ(1876-1975)は、バイアスカット*などを駆使した服作りの手法と、布が生み出す造形に新しい可能性を見出して、後世の服作りにも大きな影響を与えています。

* 生地を地の目に対して斜めにおいて裁断する手法。伸縮性やドレープを生みだし、身体にフィットさせるのに適している。

06 アクティブな女性たちと服飾小物



アッシュ・ドゥ・ノリー 帽子
1920年代後半 京都服飾文化研究財団 撮影:林雅之

鉄道や自動車で自由に遠出をするようになった女性たち。彼女たちを飾る帽子やバッグといった服飾小物には、前時代のそれと比べ簡易さや軽やかさが求められました。人々の時間の感覚も大きく変化したこの時代、機能的かつ装飾性に富んだ腕時計が登場します。こうした服飾小物は、アクティブな女性の装いを完成させる重要なアイテムでした。また外出先での化粧直しのための化粧道具も小型化します。パウダー入りのコンパクトやスティック型の口紅など、小さくエレガントな化粧道具が女性たちの携帯品に加わりました。

ルースパウダー入りコンパクト
1922-1925年
カネボウ化粧品(アンティークコンパクトコレクション)
撮影:若林勇人



ジャン・デュナン バックル[中右]
コンパクト[上][中左][下]
1925年頃 京都服飾文化研究財団
撮影:畠山崇



時計付きライター ダンヒル社
1920年代 個人蔵 撮影:若林勇人

日本の漆芸を学んだ

工芸家ジャン・デュナンは漆を金属に塗布するなど、

斬新なアイデアで服飾小物を多数制作

靴を眺める際のヒールのサンプル。

ラインストーンや手彩色による

細密で精巧な装飾が足元に



ヒール 1925年頃
京都服飾文化研究財団 撮影:広川泰士



ハンドバッグ
1920年代 京都服飾文化研究財団
水島納子氏寄贈 撮影:来田猛



シャネル デイ・アンサンブル 1928年頃
京都服飾文化研究財団 撮影:広川泰士

07 スポーツとモード

”リゾート”は当時の新しい生活様式のなかに広がり、スポーティーな服が注目の的!



ジャン・パトゥ ピーチウェア 1929年頃
京都服飾文化研究財団 撮影: 畠山崇



スキーウェア 1930年頃
京都服飾文化研究財団 撮影: 畠山崇



タマラ・ド・レンピッカ
《サンモリツ》
1929年 オルレアン
美術館
© Tamara de Lempicka
Estate, LLC/ADAGP,
Paris&JASPAR, Tokyo,
2025 G3900



ジャンヌ・アギヨン
『今日のモードの
エッセンス』より
1920年
京都服飾文化研究財団

フランスで大ベストセラーになったヴィクトル・マルグリットによる小説『ラ・ギャルソンヌ (La garçonne)』(1922年)の主人公モニクは、テニスやゴルフなどスポーツに熱中する第一次世界大戦後の若い女性。当時、本作になぞらえ「ギャルソンヌ (少年のような娘)」と呼ばれた自由闊達な女性たちが時代の寵児となり、モードを牽引しました。彼女らの登場とともに、前世紀には労働者を連想させた日焼けは、裕福さのステータスシンボルへと変容していきました。女性のテニス選手、水泳選手も登場し、スポーツは余暇から競技まで人々のあいだに幅広く浸透していきます。こうした動きにいち早く反応したジャン・パトゥ (1887-1936) やジャンヌ・ランバン、ガブリエル・シャネルらクチュリエたちが自身のメゾンにスポーツ部門を開設することで、スポーツウェアは洗練されていきました。

08 今に受け継がれるアール・デコのモード

20年代のデュフィのテキスタイルを彷彿とさせるデザインが現代に!



ポール・ポワレ
デイ・ドレス (テキスタイルデザイン: ラウル・
デュフィ) 1922年頃 京都服飾文化研究財団
撮影: 林雅之



マーク・ジェイコブス
ジャケット、パンツ
2014年春夏 京都服飾文化研究財団
撮影: 来田猛

1930年代に、その流行の終焉を迎えたアール・デコ。一度は忘れられたこの様式が再び見出されたのは、1960年代でした。きっかけとなったのは、1966年にパリ装飾芸術美術館で開催された「LES ANNÉES 25 (25年代)」展。背景として、第二次世界大戦後の経済成長や女性の社会参画への機運といった社会的類似性、さらに60年代に盛んになるミニマルアートやポップアートとの芸術的親和性が指摘できます。モードにおいても、60年代のクリストバル・バレンシアガ(1895-1972)やピエール・カルダン(1922-2020)、イヴ・サンローラン(1936-2008)のミニ・ドレスなどに、20年代のスタイルに呼応する簡潔さや装飾性が投影されています。さらに2000年代以降には、アール・デコ期における、モードとラウル・デュフィの協業を彷彿とさせる、芸術ジャンルを横断した創作に基づくテイストがしばしば見出されます。アール・デコ期のモードの現代性は100年を経た今もなお私たちに惹きつけています。